九州産業大学国際文化学部紀要　第7号 49-60（1996）

飢饉の歴史地理学的研究

―― インドを中心として［3］――

二　木　敏　篤　・　井手口　　敬

（1996年9月24日受理）

5　インドの飢饉（1）

インドは中国，ロシアと並んで飢饉の多発地域と言われてきた。インドが亜大陸と呼ばれる広大な面積を有し，自然・文化環境が極めて多様性に富んでいることに飢饉多発の要因が潜んでいるものと思われる。

この地域は，南は赤道に近いスリランカから北はカシミールの北緯38度まで，東西方向は東経65度から東経95度附近までの広大な範囲に及んでいる。したがって，その気候も多様性に富み，熱帯を中心として温帯から乾燥気候，そして北辺のヒマラヤには高山気候が分布する。ただし，全般的にはモンスーンの影響を受けている。

インドの農業は“モンスーンギャンブル”と言われる。それはモンスーンの雨季の降雨の多寡により豊・不作が決定されてきたためである。加えて，西部の大インド（タール）砂漠には不毛の大地が広がり，雑穀栽培を中心とするデカン地方は，一般にモンスーンの風下にあたるため小雨地域が広がり農業条件も悪く，飢饉の被害の多い地域となっている。インドで特に飢饉の頻度が高かったのはこのデカン高原とインド北西部であった[(1)]。乾燥による農業の限界地域に位置するこれら地域では，モンスーンの気まぐれな僅かな気候変動によっても，農業生産に大きな被害がもたらされたのである。その上に，飢饉の多発に拍車をかけた要因として以下の文化的・社会的要因が挙げられる。

多様な言語・宗教と複雑なカーストからなるインド社会では，宗教やカーストの違いによる食生活の違いが顕著であるが，中でも栄養面で蛋白質の不足しがちな菜食主義者にとって，飢饉に際して体力的抵抗力の弱さが災いし，或いは，多彩な食物選好や食物に関する様々なタブーの存在が飢饉の救援策をより複雑にするなどの問題が存在する。

第一次産業のウエイトが大きいインドでは住民の多くは農業に依存し，伝統的な村

落共同体の中での生活を余儀なくされる。伝統的な村落共同体は，強固な靱帯で結ばれた政治・経済の基本的単位で，これを Bowman は「インドの社会は，その基本的特徴が村落組織のなかにある。インドの長く複雑な歴史は，征服，領国間の競合，飢饉および蝗害，疫病などといった数百万人の命を奪った災害によって変化してきたが，その村落組織と村落共同体の連合組織は存続した。このような連合組織はインドで最も持続性の強い組織であった。インドにおける現状の改善は，自治の基礎としての村落共同体の価値に注意がはらわれた場合にだけ可能になるだろう[(2)]」と述べている。この様に生活の基盤をなす村落共同体が，歴史的に経験してきた共同体を根底から揺るがす様々な問題に対して，有効な対策を講じることなく頑固に存続し続けていることは，現世の苦しい現実を素直に受け入れ，来世での豊かな生活を期待するヒンドゥーの宗教的影響が大きく作用していると考えられる。

他面，Aykroyd は，古代からインドで飢饉を発生させた要因として「大衆の極端な貧困は，経済的にも身体的にも生存ぎりぎりのものである。食糧源は不確定な降雨に依存する単純な農業である。国土の広さと交通・通信施設の不足は，最近まで穀物の地域内輸送を妨げてきた。飢饉救援のための食糧の確保は，明らかに飢饉地域と食糧が入手可能な地域の間の単なる距離に関係するだけではない。それはこれらの地域間の交通・通信事情に依存する。マドラスにおける豊作は，輸送手段が牛車しかなかった時代には，ラジャスタン州における飢饉には何の役にも立たなかったであろう[(3)]」として地域間交通の未整備を指摘している。さらに，「自然的原因を別として，飢饉の最も強力な要因は，内戦による混乱であった。歴史の大部分を通じて，インドは皇帝と土侯と侵入者の絶え間ない争いにまきこまれてきた。戦争は，単なる食糧不足をしばしば飢饉に変えた。軍隊は直接には作物と家畜を破壊はしないが，軍隊があることだけで農民には重荷になった。何故なら，軍人に食糧を供給し，給料を支払わなければならず，もし，彼等に食糧を供給し給料を支払わなければ，彼等は農村を破壊するからである。そのうえ，戦争は飢饉を生じさせるばかりでなく，それを救済するための努力を妨げることになるのである[(3)]」と述べ，限られた食料をめぐる生存のための権力争いとその紛争による飢饉の頻発という，飢饉の，いわば生きるための必要悪としての側面を指摘している。

これまでインドにおける飢饉の研究は数多いが，イギリスの学者 Loveday の『The History of Indian Famines (1914)』の研究が先駆的なものである。インド人学者としては，Bhatia の『Famines in India ——A Study in Some Aspects of the Economic History of India with Special Reference to Food Probrem 1860～1990』が代表的な研究である。

インドの飢饉を分析するにあたってイギリス勢力の侵入前とその植民地支配後とで飢饉の性格に大きな差が存在する。Dando は，その転換期として1707年を提示している。それはオウラングゼーブ帝の死去の年にあたる。それはムガル帝国の衰退を象徴しており，同時に，この時期に東インド会社の支配の基盤が確立したことなどを考慮してこの年を選んだものと思われる。それに対して Bhatia は，1860年を転換期と考えているようである。その根拠として，1858年にインド大反乱（セポイの反乱）がイギリスの勝利に終わり，ムガル帝国が滅亡したことを挙げている。この後，インドはイギリスの植民地支配の時期を迎えるが，Bhatia はここにインドの飢饉研究の出発点を求めている。

筆者らは，飢饉の性格が1707年の段階で既に大きな変化を生じていると考えているので，本論では，Dando の説を採ることにする。

ここで，飢饉の型と段階について簡単に整理しておきたい。

Maloo はインドの飢饉をその大きさから次の４つに分類している[4]。

1. Ann-kal　食用穀物の欠乏
2. Jal-kal　飲料水の不足も含む
3. Tin-kal　牧畜の盛んな地域における家畜の飼料の欠乏も含む
4. Maha-kal（Tri-kal）　上記の穀物，飲料水，飼料のすべてが不足する大飢饉

この分類は下位になるほど飢饉の被害が厳しい順に配列されている。

次に，インドの飢饉の歴史についてその概要を整理してみたい。

インドの飢饉史 (1)　BC293～1707年

この時期，特に前半の飢饉については正確にはわからないことが多い。一応，記録に残るものを集めたのが飢饉年表（その１）である。これによると BC293～1707年にかけて飢饉は61回起こったことになる。Loveday と Bhatia の研究によると，297年から1947年までに70回の飢饉が記録されていると言う。また Dando は，大きなものが40年毎に起こったと推定している[5]が，恐らく地域的な飢饉はこれらの数値以上に数多く発生したものと思われる。

歴史時代以前からインドの民衆は飢饉に苦しめられてきた。そのことは伝承のなかにも残されている。

インド最古の宗教文献はヴェーダといい，その中でも『リグ・ヴェーダ賛歌』が特に古い。それが創られたのは BC1200～BC1000年を中核として前後数百年間と言われている。このなかに飢饉に関する直接的な記述はないが，降雨が少なく穀物に被害が生じたことが記されている。また，全賛歌の約四分の一を占めるのがインドラ神に関

表1　インド飢饉年表（その1）　BC293～1707年

発生年	被災地域	飢饉の概要	関連事項
BC 293	ビハール地方	およそ12年災害つづく。	マウリア朝ビンドゥサーラ王
AD297	マガダ（ビハール）地方	伝承による。	ヴァーカータカ朝
445	カシミール地方	発生時期は不明確。	グプタ朝
650	全インド		中国僧玄奘帰国直後
917～18	カシミール地方	高い死亡率となる。しかし災害実態不明確。	ラーシュトラクータ朝 インドラⅢ世
947	全インド		パーラ朝
1022	〃		ラージプート諸国
1033	〃　特にヒンドスタン地方	世界各地で飢饉おこる。疫病流行。	カンダーリア・マハーディブ寺院建立
1116～19	デカン地方，ブルハンプール		チョーラ朝
1200	ボンベイ	伝承によると災害は12年間続く。	ヤーダウァ朝
1259	〃		パーンディア朝
1291	デリー，シワリーク地方	この年の翌年，一部の人の記憶では降雨ありと。	ヒルジー朝はじまる。
1296～1317	〃	正確な飢饉年は不明確，恐らく1305年か。	ヒルジー朝 アラーウッディーン
1326～27	ドゥアブ地方		トゥグルク朝 ムハンマド・ビン・トゥグルク
1334～35	？		〃
1343～45	デリー	被災者はベンガルへ移住。疫病流行する。 災害を酷くしたのは旱魃よりもモハメッド・ツグルークによる混乱状態が主因という。	〃
1351～63	カシミール地方		トゥグルク朝 フィローズ・シャーⅢ世
1362～66	シワリーク丘陵地方		〃
1396	南インド全域特にデカン	12年続く。「ドウルガ神の飢饉」と呼ばれる。	トゥグルク朝 マフムッド・シャー
1399	北インド	チムールの侵入が被害をひどくする。	〃
1402～3	南インド		〃
1412～13	〃	カウベリー川の氾濫でタンジャビール地方が被災。	〃
1423	デカン地方	サルタン自ら1424年に雨乞いの祈禱し降雨あり。	サイイッド朝ムバーラク
1424	？		〃
1460	ボンベイ		ロディ朝バハロール・ロディ
1471～72	北インド・ボンベイ，ビジャプール	2年間播種できず。	〃
1494	デリー		ロディ朝ニザーム・ハーン・ミカンダル・ロディ
1500	〃	戦乱で救援できず。	〃
1509	マイソール地方		〃
1520	ボンベイ，デカン地方	デカン地方は戦争での被害含む。救援なし	ロディ朝 イブラーヒム・ロディ
1523	？		〃

発生年	被災地域	飢饉の概要	関連事項
1527	シンド地方	飢饉6カ月続く。穀物が焼けたことが原因。	ムガール帝国初代バーブル
1540	コロマンデル海岸地方	デカン半島東海岸部全域に拡大。	ムガール帝国2代フマユーン
1540～43	シンド地方，マイソール地方	旱魃2年続く。ビジャナガル王国で戦乱おこり被害大きくなり人肉食もおこる。	〃
1554～55	デリー，アグラ，バジャナ県	人々はアカシアの種子や牛皮を食べる。	〃
1555～56	北インド，特にデリー周辺部		〃
1556	ヒンドスタン平原	人肉食おこる。	ムガール帝国 3代アクバル大帝
1571～74	グジャラート地方	飢饉のため住民流出する者多い。	〃
1576	デリー	救援なし。	〃
1577	クッチ半島部	アクバル帝，調理した食物を救援する。	〃
1583～84	全インド	アクバル帝，軍隊により救援活動。	〃
1592	ショラプール県	疫病流行。	〃
1594～98	中央インド，ヒンドスタン平原特にラホール，カシミール地方	3～4年続く飢饉はアジア全域に拡がる。疫病流行。	〃
1613～15	パンジャブ地方，南インド	疫病流行に始まり，続いて飢饉発生。	ムガール帝国 4代ジャハーンギル
1618～19	ビジャナガル		〃
1623	グジャラート（アーメダバード）		〃
1628～29	フーズール地方	人肉食	ムガール帝国 5代シャージャハーン
1629～30	デカン全域	シャージャハーン帝支配のほぼ全域に拡大。最悪の飢饉となる。	〃
1630～31	北インド・グジャラート地方，マルワの一部	インド全域が被災。	〃
1641	カシミール地方		〃
1642	〃		〃
1646	パンジャブ地方		〃
1648	？		〃
1650	アーメダバード地方		〃
1658	シンド地方		ムガール帝国 6代アウラングゼーブ
1658～60	全インド，特にグジャラート，シンド地方		〃
1661	北インド	デリーとドゥアブ地方の北半部で被害甚大。	〃
1676～77	ハイダラバード特にグルブルカ県	降雨過多が原因。	〃
1685	デカン地方（ハイダラバード）	酷い旱魃が原因。戦争で救援活動なし	〃
1687	〃		〃
1702～04	〃　ボンベイ	戦乱で救援活動できず。	〃

Bhatia, Kulkarni, Loveday, Maloo による。

するものである。

「汝らは雄力もて排水溝を穿ち開きたり。支配力ある太陽を天界に運行せしめたり。インドラ・ヴァルナよ，汝らは幻力あるソーマの陶酔において，涸れたる水をみなぎらしめたり[6]」の記述に見られるように，インドラ神は雷霆神の性格が顕著で，暴風神マルト神群を従える。この神は，武器ヴァジュラ[7] をもって，水をせき止めるヴリトラ[8] を退治する武勲をたてると言うように水に関係が深い神である。また，ヴェーダの一つ，『アタルヴァ・ヴェーダ賛歌』には"雨を乞うための呪文"として「裂けよ，大地よ（大雨を受入れるため？）破れこの天界の雲を。ダートリ[9] よ，汝は支配者として，われらのために，天界の水の革袋を解け[10]」「熱は焼かざりし。霜は打たざりし。生気を与うる大地をして裂けしめよ。水は，グリタ[11] は，実に彼のために流る[12]」との記述もあり，渇水がインド人の生活に大きな影響を及ぼしていたことがうかがえる。

飢饉の記述が始めて見えるのはBC 4 世紀（BC 3 世紀？）の『ラーマーヤナ』と『マハーバーラタ』の二大詩篇においてである。

「世間の人々はラーマの治政を謳歌し，満足し，衣食に不自由することなく，また礼節を守ったし，国内には疫病も災害もなく，飢饉の怖れもなかった。……火災の怖れもまったくなく，暴風の怖れも炎熱による災害もまったくなかった。飢餓の怖れもまったくなく，盗賊の怖れもまたなかったし[13]」と太平を楽しんでいた。しかし，「アンガの国に，ローマパーダという偉大な勢力をもち，世間によく知られた勇敢な王がいました。この王の暴政のために怖ろしい非常な旱魃が起こり[14] 王はその対策を講じ，その結果雨が降った」と言う記述がある。また，マハーバーラタにも「聖仙たちがヒマバット（ヒマラヤ）にいる間に旱魃が起こり十二年間もつづいた[15]」との記述が見られ，旱魃による飢饉があったことが認められる。

BC304年頃の記述については，ギリシア人のメガステネスのものがある。彼は，シリア王セレウコスの使節としてマウリア朝の都パータリプトラ（現パトナ市）を訪れたが，長期間インドに滞在し，帰国後に『インド誌』を書いた人物である。彼の著書の原典は残されていないが，多くの書物に引用されており，その概要は知ることが出来る。彼はそのなかで「灌漑があったから飢饉は全く認められなかったと」述べている。しかし，反面「あまりに多くの食糧難の時代に言及しているのが見られるし，また，メガステーネスが住んでいたパトナに隣接する当の諸地域においてもそうであって，我々が問題にしている時代については，彼の述べていることは正確であると認めることはできない程である[16]」とデヴィッズは『仏教時代のインド』でメガステネスの記述を否定しており，メガテステネスの言うこの時期のインドの豊かさについて疑

問を投げかけている。

次いで，ストラボン（BC63～AD21年頃）は『世界地誌』17巻の大著を著したがメガステネスは，インド地方がいかに豊な土地を持つかということを示すため，作物が年に二度熟れる二期作地帯だという点をあげる」エラトステネスの記述もこれとおなじで，「冬蒔きと夏蒔きがあり降雨もおなじく二度あるという。後者によると，両季節共に雨の降らない年は一度として見あたらず，この結果，大地に実りをもたらさない季節がまったくないから年中が栽培適期となる[17]」とあり，この著書には，飢饉が全くないとの記述は見当たらないが，インドの豊さを示すものとして注目される。しかしこの点は，当時のヨーロッパ社会のインドに対するステレオタイプ的な記述と見なされないこともない。

反面，BC 4 世紀後半から BC 3 世紀初めにチャンドラグプタのマウリヤ朝の名宰相カウティリアの『アルタシャーストラ（実利論）』には飢饉について言及されている。Dando によると「バドラパーダ Bhadrapada の月には，耕地は普通，ちょうど稔りつつある秋稲でおおわれているのであるが，予想もしない大雪が降った。稲は，あらゆる生き物を殺す事に夢中になっている死神の笑いに似たこの大雪の下に埋まり，人々の生存の希望と一緒に腐ってしまった。それから恐ろしい飢饉になった。飢饉は，飢えた多数の人々が幽霊のようにうごめいている地獄に似ていた。飢えに苦しむ人々はだれも自分の胃袋のことしか考えず，妻を愛することも子供達を慈しむことも忘れ，両親をいたわることさえも忘れてしまった。人々は飢えにやつれ果て，荒い言葉をはき，恐ろしいものを見て，目をぎょろつかせた。人々は他のあらゆる生き物を犠牲にして，生きようと努めた[18]」との記述があり，渇水以外にも大雪による飢饉が発生したことが認められる。ただしこの点については，Shamasastry の『Kautilya's Arthasastra』や岩波文庫の『実利論上下』にはみあたらない。次いで，「天的な苦難は，火災，洪水，病気，飢饉，疫病である。病気と飢饉とでは，病気は，死んだり病んだり苦しんだりさせて労働者の労働を阻害するから，諸事業を破壊する。しかるに飢饉は，事業を破壊することはなく，金銭や家畜の形で租税をもたらすとの言葉に，カウティリアは，飢饉は全国を苦しめ，生類を生活できなくする（第 4 章第130項目）[19]」と飢饉について述べており，飢饉による大衆の苦難を表すと共に飢饉時に富を蓄積していく権力者の存在を明記している。また第 3 章第78項目では「飢饉の際には，王は種子と食物とを援助し，人々に恩恵をかけるべきである。あるいは，食物を恵んで城砦や灌漑用水を作らせる。あるいは，彼の糧食を人々に分ける。あるいは，他の王に国土を託すべきである。あるいは，友邦に援助を求めるべきである。あるいは，人口を削減したり，移動をさせたりする。あるいは，穀物を産する他の地域に民衆とともに移

住すべきである。あるいは，海や湖や貯水池に寄る辺を求めるべきである。彼は灌漑用水の側に穀物・野菜・球根・果実の種を蒔かせたり，鹿・家畜・鳥・野獣・魚を捕えさせるべきである[20]」と飢饉の対策を論じている。これは，飢饉の対策を論じた最初の書である。ただし，裏を返せば，飢饉の時に財の蓄積に熱中する支配者の存在が浮かび上がる。

このマウリヤ朝のBC293年にビハール地方[21]に過酷な飢饉が起こり，12年間続いたと言う。さらに，伝承によるとヴァーカータカ朝の297年にマガダ地方にも飢饉が起こっている。これらについては，特に前者の場合，その継続性から見て自然的要因のみではなく，政治的要因が深く関わっていることが考えられる。そして650年には全インドに飢饉の被害がでたと言う。その詳細は不明であるが，全インドが画一的な飢饉に襲われたとは考え難く，自然的・社会的要因が複雑に絡み合った複合的な飢饉であったと推測できる。次いで，917～18年のカシミール地方に発生した飢饉については，Kalhanaの『Raj Tarangini』に記載されている。これは，「Vitasta（現ジェラム）川の水がすっかり涸れ上がり，長い間放置されていた水ぶくれの死体で完全に一杯となり水がほとんど見えなかった。この死体が骨となって大地のいたるところを埋めつくしてあたかも大きな墓地のようになって人々に恐怖をあたえていた。王の大臣たちと衛兵は貯蔵米を売って豊になった[22]」というものであり，ここでも飢饉で苦しむ大衆の陰に，この飢饉を利用して暴利をむさぼった支配者たちの存在が示されている。

7世紀前半から始まり8世紀になると西方からのイスラムの侵入が本格的に始まる。この時期，947年，1022年，1033年にはほぼ全国的に飢饉が起こっている[23]。この最後の飢饉はインドだけでなく世界的に広がったと言われている。この飢饉での被害がより大きなものになったのは疫病を伴ったからであった。歴史的にみると飢饉は単に自然災害によるのでなく，被害を増大させる悪政，失政が多かったことはこれまで報告でも見てきた通りである。その中で，ヒルジー朝のアラーウッディーンは積極的な経済改革を断行[24]，奢侈品の価格を統一し，各種の税率を改め，物価の低下と価格の統一維持を図った。これによって経済生活は表面上安定したが，急激な変化には無理があり，彼の死後，かえって経済的混乱が起こったと[25]言う。ここにも，経済改革の逆手をとって利益の確保に走った支配者階級の暗躍がうかがわれる。

ヒルジー朝のジャラールッディーン・フィーローズ・シャーの1291年の飢饉ではデリーとシワリーク丘陵での被害が酷かった。多くの人々が12から30家族で一緒にデリーにやって来たもののそこでも食べ物はなく，飢えの苦しみのあまりヤムナ川に身を投じるものが多くでている[26]。言い方を変えれば，ヒマラヤから流れ出す豊かな水

も功を奏さない技術段階にあったと言える。

1334～40年にインドを訪れたイブン・バットゥータは「多くの州が飢饉に襲われた。スルターンは軍隊を率いて，デリーから十日行程のところにあるガンジス河畔に赴き，がっしりした建物をつくらせ，火災に備えて地下に洞窟を掘らせ，万一の場合はそこに物品を投げ入れて，土で口を塞ぐようにした。わたくしも，王の宿営地に移ったが，ガンジスの西，国王のいる側は飢饉に悩まされているのに，河の東方は豊作を楽しんでいた[27]」と記している。史料は「この後2世紀にはヒンドゥー王朝とイスラム王朝とのうち続く戦争による食糧不足で飢饉が頻発したが，この飢饉は救援が軍令で禁止されたことが被害を更に酷くした」ことを示している。ここでは，飢饉が単に，食料不足や輸送手段の未整備と言う要因ではなく，宗教的対立や武力的対立が飢饉の大きな原因になることを示している。

次いで，旱魃の頻発した1343～45年のうち続く飢饉はトゥグルクの時期にあたるが，Zia Barniがやや誇張した表現ではあるが「国の栄光とサルタンムハンマドの権力はこの飢饉を期に衰退していった[28]」この飢饉では，デリー周辺の地方で飼料不足のために牛馬が多く死んでいる。1366年の飢饉はその後12年続くがこれも旱魃によって起こった。サルタンは特別の「Amir Kohi」という役所を設けデリー近傍に農場をつくったり，食べ物を人々に与える救援小屋を設置するなどの対策を講じた[29]。また，ツゥグルク朝のムハンマド・ビン・ツゥグルクは飢饉救援策を組織化した最初の支配者であった。1343年にデリーの市民に6カ月間食物を分配し，農業のための金庫からの資金で井戸を掘り，この作業によって労働力を吸収せんとした[30]。この時期，支配者の一部は積極的に飢饉対策に取り組んでいる。

しかし，1396年の南インドの飢饉，1399年のチムールの北インド侵入による飢饉，1402～3年のタンジョール地方に起こったコウベリ川の洪水による飢饉[31]，1424年にデリーを中心とする渇水による飢饉などでは，安定した政府がないために飢饉の被害が一層拡大してしまった。

ムガル帝国は1526年にバーブルによって創始された。3代のアクバル帝時代に北インド一帯の支配王朝として権力が確立する。ムガルの支配のもとでは，逆に飢饉が生じる社会経済環境がつくられることになった。支配権の拡大過程でムガル軍に食糧を確保できないように農地の焦土作戦や作付け禁止がおこなわれ，各地への食糧移出の禁止（穀止め）などが戦術として実施されたことも飢饉の原因となった。皇帝は土地保有を堅固なものにし，国土は拡大したもののヒンドゥー勢力から絶えず攻撃され，帝国は危険にさらされることにもなった。この時代には人肉食（cannibalism）も珍しくはなかった。

この中にあって，アクバル帝の対策は，注目される。彼は帝国内の各所に救援小屋をつくりそこではヒンドウー教徒（Dhrampura），イスラム教徒（Khairpura），苦行者（Jogipura）と各々別の部屋を設け，また，職なきものに仕事を与える目的で軍に兵士として採用する[32] など対策を講じたという。

1595～98年に北インドで，特にカシミール，ラホールが酷かったが，大飢饉が発生し，1596年にはアジア全域に及んだ[33]。この大飢饉では，アクバル帝は食べ物の自由配分への処置をとり，カシミール地方の中心都市スリナガルに12カ所の救援小屋を設け８万人に食べ物を配っている。さらに，帝は被災者に仕事を与える目的で城塞を建設，そして飢饉特別官を置いた。飢饉後は各県に食糧と飼料の貯蔵小屋を作らせている。これらの小屋は政府により飢饉保険として耕地から物で１ビガ（5/8 エーカー）当たり10シアー（約２ポンド）の税により維持された。飢饉時には家畜の飼料，農民には穀物の種子が用意され，食糧は安い価格で売られた。更に各県に常駐の管理官を置いて救援小屋を管理させる[34] など，組織的な飢饉対策が進められた。

しかし，ムガル帝国第５代皇帝シャー・ジャハーンの治世時代には様相が変わる。ムガル帝国はさらに領土も拡大し，帝国の黄金時代を迎える。タージ・マハルの建設に代表される宮廷の華麗な文化は，宮廷の費用を増大させたために地税が増額され，経済的には財政の膨大化を招き，諸政策の実施をゆきづまらせた。そこで強権政策がとられ，地税徴収が強化された。これが飢饉の原因となる。1629～30年のデカンの飢饉もその一つであった。「……死者の数はあらゆる算定や推定をこえていた。いくつかの都市とその周辺および農村には，人間の頭骸骨が散らばっていた。穀物ではなく人が互いに食いあった。親が子供たちをむさぼり食った。パン屋は古い骨やなんでも手に入るものを粉にひき，それに小麦を少し混ぜて菓子にして売った。それは金持ちにとって価値の高い貴重品であった。太陽で干からびた人体をみつけた人々は，それを水に浸して食った[35]」が，この悲惨な状況にたいして皇帝はなんらの効果的な対策を講じることが出来なかった。ここにも飢饉の二重構造が表れている。

しかし，全般的には，ムガルの飢饉対策は下記の対策を講じることにより，かなりの効果を挙げたと言える。[36]

(1) 粗食料の自由分配
(2) 救援小屋の設置
(3) 公的食糧販売所の設置
(4) 地代の減免
(5) 貧民に有利な支払方法
(6) その他の税の減免

(7) 公共工事の実施

(8) 移住の奨励

(9) 兵士の賃金増

以上見てきたように，インド西部の乾燥地域やデカン高原における飢饉は，降水量に恵まれない厳しい農業条件下では，平年的にも生存ギリギリの水準であるため，モンスーンの気まぐれな変動によって大きな打撃を受けたことに起因することが多かった。また，この地域は民族移動の主要なルートにあたり，加えて比較的単調な地形条件は民族の住み分けを困難にした。そのため，民族間の対立や紛争が多発し，農産物の不要な消耗が行われたこと，さらに飢饉地域の救援が軍事的対立や宗教的対立によって円滑に行われなかったこと，加えてこれらの要因が複合的に作用して支配者階級の統治機構が容易には未熟な段階から脱しきれなかったことなどが飢饉の酷さに拍車をかけることになった。

なお深沢は，村落やカーストによる強い「共同体規制」と飢饉との関わりについて言及している。その中で，彼は，「共同体規制」によって彼等の法制的自由は実質的にはかなり大きく制約されていたようで，それが戦乱や飢饉の際に村ごと逃散し，事態が平穏に復すると再び元の村に帰ってくるのが普通であったとしているが，16世紀末から17世紀全般にわたるムガルとデカン諸王国との戦争や，1630～32年，1655年などの大飢饉の場合は，永久に郷村を去り流民となる者も少なからず現れた[37]と，この時期の農民の行動を記している。このことは，後章でも触れるが，「共同体規制」がイギリスの植民地政策の基本として，税収の安定と治安維持のために行われた「住民の定着強制」と同様に，本来，定着の困難な地域へ住民を縛り付けることによって飢饉の被害をより大きなものとしたことと共通するものがあることが指摘できる。

（未完）

参 考 文 献

Bhatia, B. M. (1991) : Famines in India, Dehli, Konark Publishers LTD.

Dando, M. A. (1980) : The Geography of Famine, London, Edward Arnold.

Kulkarni, S. A. (1990) : Famines Droughts and Scarcities in India, Allahabad, Ghugh Publication.

Loveday, A. (1914, 1985) : The History & Economics of Indian Famines, New Delhi, Usha Jain.

Maloo, K. (1987) : The History of Famines in Rajputana, Udaipur, Himanshu Publications.

Shamasastry, R. (1915, 1967) : KAUTILYA'S ARTHASAATRA, Mysore, Mysore Printing & Publishing House.

注

(1) Dando p. 80.
(2) Bowman, I. (1923)：The New World-Ploblems in Political Geography, New York, World Book Co. p. 48.
(3) Aykroyd, W. (1975)：The Conquest of Famine, New York, Readers Digest Press. pp. 49-50.
(4) Maloo p. 7.
(5) 前掲（1） p. 80.
(6) 辻直四郎訳（1979)：リグヴェーダ賛歌，岩波文庫，p. 166.
(7) ヴァジュラとはインドラ神の用いる武器，「金剛杵」電撃の意。
(8) ヴリトラとは水をせきとめる悪龍の意。
(9) ダートリとは創造神の意。
(10) 辻直四郎訳（1979)：アタルヴァ ヴェーダ賛歌，岩波文庫，p. 162.
(11) グリタとはバター油の意。
(12) 前掲（9） p. 162.
(13) ヴァルミーキ，岩本裕訳（1982)：ラーマーヤナ I，東洋文庫，平凡社，pp. 14-15.
(14) 前掲（13） p. 39.
(15) 山際素男篇訳（1996)：マハーバーラタ第五巻，三一書房，p. 287.
(16) リス・デヴィッツ，中村昭次訳（1984)：仏教時代のインド，大東出版社，p. 36.
(17) ストラボン，飯尾都人訳（1994)：世界地誌 II，龍渓書房，p. 391.
(18) 前掲（4） p. 133.
(19) カウティリヤ，上村勝彦訳（1984)：実利論(上)，岩波文庫，pp. 161-162.
(20) 前掲（19） p. 329.
(21) マガダ地方は古来北東インドの地名，現ビハール州南部にあたる。
(22) 前掲（3） p. 8.
(23) 前掲（3） p. 7.
(24) 前掲（3） p. 8.
(25) 前掲（3） p. 8.
(26) 前掲（3） p. 8.
(27) イブン・バットータ，前島信次訳（1956)：三大陸周遊記，河出書房，p. 238.
(28) Loveday p. 12.
(29) 前掲（3） p. 8.
(30) 前掲（3） p. 8.
(31) 前掲（3） p. 9.
(32) 前掲（1） p. 9.
(33) 前掲（3） p. 10.
(34) 前掲（3） p. 10.
(35) 前掲（1） p. 134.
(36) Kulkarni, S. N. (1990)：Famines Drought and Scarcities in India, Chugh Publishing, Allahabad, pp. 28-29.
(37) 深沢　宏（1990)：インド農村社会経済史の研究，東洋経済新報社，p. 38.